



ドレスデン聖十字架合唱団 & 森 麻季 クリスマス・コンサート

聖夜に浸る伝統の「声」

ドレスデン聖十字架合唱団の魅力

音楽評論家:加藤浩子

2年前、ドレスデン。聖霊降臨祭(ペンテコステ)の祝日とあって、街は観光客でにぎわっていた。

とりわけ人の波が多かったのは、第2次世界大戦の空襲で瓦礫と化したまま放置されていた姿から再建されたばかりの聖母教会だった。円形の聖堂の回りを、礼拝にあずかろうというドイツ人が二重三重に取り囲んでいた。

その列を横目で眺めながら、筆者は幸福感に浸っていた。つい先ほど、聖十字架教会で、信者さんたちに混じて礼拝を体験してきたからである。温かな気持ちに包まれていたのは(信

徒の方々には失礼ながら)、そこで体験した「音楽」のせいだった。聖母教会のように華やかな教会でもなく、専属の楽団もない、純粋に合唱団だけの演奏だったが、そのテクニックの正確さ、澄みきっていながら強靱な声、くっきりと浮かび上がるポリフォニーの旋律線、それらが一体となった音楽が、聖歌隊席から文字通り降り注いでくる、その天上の響きに酔ってしまったのである。会堂は簡素に、しかし礼拝は音楽で飾る、それこそまさにマルティン・ルターが望んでいたことだった。ドレスデンに数ある教会の中で、聖十字架教会ほどその理想に近い教会はないのではないだろうか。

もっとも日常的な音楽である教会音楽は、その町の音楽の底力を教えてくれる。世界最古の少年合唱団でもある聖十字架教会合唱団のずばぬけた実力は、ドレスデンの音楽の底力をあますことなく示してくれたのである。

今回、聖十字架合唱団が日本で披露するクリスマス・コンサートでは、この合唱団の魅力がたっぷり味わえる。17世紀にこの

合唱団と関係のあったドイツの大作曲家、ハインリッヒ・シュッツの宗教作品や、ブラームスのモテットは、まさに自家薬籠中の作品。もちろん、「きよしこの夜」など、定番のクリスマス・ソングも欠かせない。そしてソリストとして大輪の花を添えるのは、日本を代表するソプラノ、森麻季。彼女の澄んだ声で歌われる「メサイア」をはじめとする名曲は、1年の疲れを洗い流してくれることだろう。

ジャパン・アーツ主催公演

12月4日(木) 19時開演

フランク:天使の糧

ヘンデル:「メサイア」より

モーツァルト:「聖職者のための夕べの祈り」より

ブラームス:2つのモテットより

J.S.バッハ:おお、甘く慈悲深き幼きイエス

「きよしこの夜」、アヴェ・マリアほか

S¥7,500 A¥6,500 B¥5,500 C¥4,500 D¥3,500

夢倶楽部会員 S¥6,800 A¥5,900 B¥5,000 C¥4,100 D¥3,200

森 麻季
(ソプラノ)

